

追悼

市川浩一郎先生のご逝去を悼む

八尾 昭



市川浩一郎先生は、2009年11月25日午前10時30分にご逝去された（享年86歳）。先生は古生物学・地質学分野の研究・教育において多大な業績を挙げられ、国際的にも貢献された。先生に教えを受けた者の一人として、謹んで恩師のご逝去に哀悼の意を表するとともに、先生のご遺徳を偲び、この追悼文を捧げたい。

市川先生は、1923年7月14日東京市にお生まれになり、1941年3月東京府立第一中学校を卒業、1943年9月第一高等学校（理科乙類）を卒業、1946年9月東京帝国大学理学部地質学科を卒業、同年10月同大学院特別研究生になられた。その後、1951年4月創設間もない大阪市立大学工学部に講師として赴任された。同大学工学部は質の高い研究・教育を目指して恵まれた環境を整備し、教員スタッフとして優秀な人材を募集して市川先生に白羽の矢を立てたと聞いている。その結果、当時の地学教室基礎講座は池辺展生・藤田和夫・市原 実・市川浩一郎・石井健一先生などのそうそうたるメンバーで構成されることとなった。市川先生は1952年6月助教授、1964年4月教授（理学部）に昇任され、新設された基盤構造地質学講座（“市川研”と呼称）を担当された。赴任以降、36年の長きにわたって構造地質学、地史学、古生物学分野の研究と教育に心血を注がれた。その結果、子弟の中から学位取得者は多数に上がり、学会学術賞や研究

奨励賞等を受賞した者も多く、地質学・古生物学界で活躍している市川研出身者は少なくない。1987年3月大阪市立大学を定年退職され、名誉教授の称号を授与された。同年4月に大阪工業大学教授になられ、1993年3月に同大学を定年退職されるまで私学教育の発展に努められた。

市川先生は、日本古生物学会と日本地質学会の評議員、日本地質学会会長（1986–1987）などを歴任され、学会の発展に寄与された。このことから両学会の名誉会員になられた。また、日本学術会議古生物学研連委員、同地質学研連委員、学術審議会専門委員なども引き受けてこられた。大阪工業大学を定年退職後は先祖の地の千葉県市原市に移られ、房総地学会に加わって、特に1998年から7年間にわたり同会の会長として地質学等の普及に尽力された。以上のような広範囲にわたる功績によって、2002年春の叙勲で「勲三等瑞宝章」を授章された。本文頭のお写真は、叙勲の折に撮影されたものである。

市川先生の古生物学・層序学分野での研究業績を振り返ってみたい。先生は東京大学小林貞一教授の指導のもと、放散虫化石（後述）、および三疊系とそこから産する軟体動物化石の研究を開始された。その初期の成果は、1946年から1955年にかけて市川先生単著や小林先生との共著で多数の論文・著書として出版されている。私の手元には、先生からいただいた三疊系区分に関する論文別刷（市川、1949, 1950）がある。いずれも表紙がセピア色になっているが、“時代区分と年代区分の違い”などの内容は今もって示唆に富んでいる。軟体動物化石群に基づく本邦三疊系の生層序学的研究によって、1951年4月に日本地質学会研究奨励金を受賞された。「地史学」下巻（1953）では、大家の執筆陣の中に唯一当時若手の市川先生が加わり、三疊紀を分担執筆された。

市川先生は1955年9月から1957年11月までの間、フンボルト財団奨学金に基づくドイツのミュンヘン大学およびチュービンゲン大学客員研究員として渡欧され、ヨーロッパの古典的模式地において三疊系示準化石を研究された。その卓抜した研究成果は、*Palaeontographica*に大部の論文 *Zur Taxionomie und Phylogenie der Triadischen "Pteriidae" (Lamellibranch.)* (1958) として出版された。この論文は翼形亜綱に属する三疊紀二枚貝化石の詳細な分類とそれらの科・属の系統を考察されたもので、これが学位論文となって、1958年7月東京大学から理学博士の学位が授与された。ドイツから帰国後、三疊系だけでなく地元の上部白亜系和泉層群とそこから産する貝類化石の研究も行われ、多くの成果（Ichikawa and Maeda, 1958など）を出された。

市川先生は東京大学学部生当時に放散虫化石の研究を開始され、日本で初めて放散虫化石を新種記載（Ichikawa, 1950）するなどの成果を出されたが、以降は放散虫化石の研究を中断されていた。1967年から指導院生とともに放散虫化石の研究を再開された。私が大学院修士課程に

入学した当時（1967年）、中・古生代放散虫化石には“役立つ化石”というレッテルがついていた。しかし、市川先生は放散虫化石を岩石から固体分離・摘出して、その形態や表面・内部構造を観察できれば、必ずや“役立つ化石”になるはずだと示唆された。最初の成果は、和歌山県由良地域の秩父南帯のペルム系とされていた地層からジュラ紀放散虫化石を発見したこと（八尾・市川、1969）であり、後期古生代石灰岩体は中生層中のブロックである（市川ほか、1971）という認識に至った。1972年には市川研に走査型電子顕微鏡（SEM S-1）が導入され、一段と放散虫化石研究が進んだ。以降、西南日本の“古生層”の放散虫化石による全面的見直しへと進展し、全国的に“古生層”の多くが中生代付加体であるという実態が明らかとなり、日本列島の地質構造発達史が劇的に書き換わるという“放散虫革命”へと展開した。先生は、この一連の過程において常に指導的立場で研究の方向を指示されてきた。1982年に出版された「第1回放散虫研究集会論文集」（中世古幸次郎編：大阪微化石研究会誌特別号，no. 5）の巻頭論文で、先生は中・古生代放散虫研究史をまとめられると同時に、今後の放散虫研究のあり方を示された。さらに、総合研究（A）「西南日本の中生代含放散虫地帯の形成過程」（1984-1985年度）を研究代表者として組織され、1985年6月に大阪市立大学で開催された日本古生物学会例会シンポジウム「化石放散虫の分類・古生物地理・生層序—最近の成果より」も組織委員長として開催された。それらの成果を大阪微化石研究会誌特別号，no. 7（1986）にまとめられた。この論文集は1980年代後半以降の放散虫研究および含放散虫地帯研究のための重要文献となった。

次に、市川先生の構造地質学・テクトニクス分野における研究業績を簡潔に振り返りたい。先生は大阪市立大学に赴任後に、西南日本外帯の中・古生界層序および構造の解明を目指して石井健一・須鎗和己・中川衷三・山下昇氏らと共同研究を開始された。その中で先生は常に指導的立場で活躍され、1956年黒瀬川構造帯に関する画期的な総括論文を発表された。ドイツから帰国後は、西南日本内帯の中生界も対象に加えて研究を進められ、西南日本の地質構造発達史を4時代区分して論じられた（Ichikawa, 1964）。この論文の主旨は、Minato *et al.*（1965）や市川ほか（1970）の日本列島地質構造発達史に関する著書に引き継がれた。1960年代に国際測地学地球物理学連合（IUGG）の協力事業として国際地球内部開発計画（UMP）が実施されたが、西南日本（C-Zone）地質構造部門において先生は幹事役を果たされ、近畿地方南北地殻断面図（地質調査所、1973年）の作成に貢献された。

市川先生は、1970年代に入って指導院生とともに中央構造線の左横ずれ変位を明らかにされた（市川・宮田、1973）。これを契機にして総合研究（A）「中央構造線の

形成過程」（1975-1977年度）を研究代表者として組織された。この総研は、変成帯・白亜系一第四系・ネオテクトニクス・地震学にいたる多分野の研究者が協力するというユニークなもので、西南日本の基本地質構造の飛躍的理解に導いた。その研究成果は、Median Tectonic Line of Southwest Japan（地質学論集，No. 18, 1980）としてまとめられた。この研究で、1983年4月2日に日本地質学会より日本地質学会賞を授与された。

日本の中・古生界研究は、前述の放散虫化石研究と相まって1970年代から急速に進展し、プレートテクトニクスの視点から日本列島地質構造発達史が具体的に議論されるようになった。市川先生を中心とした大阪市立大学基盤地質研究室のこの分野での活躍は目覚ましく、研究の一中心として役割を果たしてきた。さらに東アジアの先ジュラ紀形成史に関する国際的関心の高まりに対応して、市川先生をプロジェクトリーダーとする国際地質対比計画（IGCP）の新しいプロジェクト（No. 224）Pre-Jurassic Geologic Evolution of Eastern Continental Margin of Asia（1985-1989年）が実施された。このプロジェクトは東アジア13カ国の諸研究機関の研究者で組織され、国際協力研究が深化した。その成果の一つとして、Pre-Cretaceous terranes of Japan（Ichikawa *et al.* eds., 1990）が出版された。この出版物は日本の基盤地質体を1980年代末までの最新データに基づいて地体区分し、40名近い著者がそれぞれ各地体を詳細に記述し、最後に市川先生が総括されたものである。先生がかかわってこられた日本の中・古生代テクトニクスの集大成にあたる冊子である。この冊子は1990年代以降、新しく日本の中・古生代地質構造発達史を編纂する際に、必読文献として重要な役割を果たしている。

以上のように市川先生の研究業績は、軟体動物化石・放散虫化石の古生物学から中・古生界の層序学・構造地質学、日本列島さらに東アジアの中・古生代テクトニクスに至る大変幅広い分野にわたっている。このことは先生が多分野にわたって造詣深く、自前のデータだけでなく、丹念に情報収集され、全体をまとめあげる能力にいかにも優れた方であったかを物語っている。

私は院生時代以降、市川先生の下で長い間研究生活を送らせていただいたが、先生に対するイメージは変わらない。研究者であろうと学生であろうと誰に対しても真摯に対応され、厳しくもあり、優しくもあった。学問とはどういうものであるか、研究者はどうあるべきかを身をもって示された。家庭にあっては余暇をクラシック音楽とウイスキーで過ごされることが多かったと聞いている。市川先生は、私のイメージする“学者”そのものであったような気がする。まだまだ教わるべきことの多い師を失って、残念でならない。

最後にあらためて市川浩一郎先生のご冥福をお祈りする（合掌）。